

日本カトリック司教団『見よ、それはきわめてよかった 総合的なエコロジーへの招き』

## 出版記念シンポジウム

日時:2024年9月7日(土)10:30-12:30

場所:ニコラ・バレ修道院9階会議室(千代田区六番町)

主催:カトリック東京教会管区

パネルディスカッション:一人15分

### 1. 感謝

本来は数年に一度しか発表されるはずのない「記録的短時間大雨情報」が頻繁に発令され、「線状降水帯」による非常に激しい雨が同じ場所で降り続き、各地で命に危険が及ぶ土砂災害や洪水による災害が起こっています。私たちが共に暮らす家であるこの地球が、今、大変なことになっています。その原因の一つが、私たちの日頃の行動の積み重ねにあることは紛れもない事実です。日本だけではなく世界各地の人々と手を携えて、深刻な災害をもたらしている気候危機に立ち向かわねばならなくなっている今、「総合的なエコロジー」に取り組むための手引書を日本のカトリック司教団が出版して下さったことに心より感謝いたします。

この事態に、信仰者として私たちはどう対応したらよいのかを、本書は「観る、識別する、行動する」という3段階のプロセスを踏んで解説してくれています。とても分かりやすいというのが第一印象でした。何が起きているのかを具体的に知ることなしには判断できません。いろいろと知ったとしても福音に照らして見極めなければ判断を間違えてしまいます。それらを踏まえて、なすべきことを決定し実践へとつなげていく姿勢は、すべての信者、小教区委員会のメンバー、とりわけ教会学校のリーダーが、意識して身につけなければならないものだと思います。

## 2. 小教区の宣教司牧で最も重要だと思うこと

本書の 38 頁、第 19 項は、教皇フランシスコの回勅を紹介して次のように書いています。

『ラウダート・シ』が指摘する根本課題は「人間性の内的刷新」といえるでしょう。エコロジカルな危機の原因が「人間にある」と率直に認めたくえて、人間の振る舞いの抜本的な改善が必要であり、そのためには「人間性の内側からの刷新」が欠かせないのだと指摘します。

洗礼を受ける準備段階から初聖体や堅信の秘跡に至る歩みが「人間性の内側からの刷新」を促すものになるにはどうしたらよいか。これこそが、小教区の宣教司牧で最も重要な課題だと私は考えています。聖書について学び、祈る習慣を身につける取り組みはとても大切だと思います。でもそれ以上に大切なのが、教皇聖パウロ六世が使徒的勧告『福音宣教』第 19 項に書いておられるように、「福音の力によって」、私たち自身の「価値観、関心の的、…生活様式など」をひっくり返すことだと思います。

私が信仰というものを最初に意識したのは、小学校 1 年生の時のサマーキャンプでした。フェリーで淡路島に着いて最初のプログラムは、海辺のゴミ拾いでした。ところが私たち低学年の子どもたちは、リーダーの言うことを聞かず、勝手に海の中に入って水遊びを始めてしまいました。そして私は、海に足から飛び込んで傘の骨を踏みつけ、病院に担ぎ込まれてしまいました。その結果、野外ミサもキャンプファイアーも、急遽呼びつけられた母の隣で寝転んで見学するしかありませんでした。でも教会学校のプログラムの中に組み込まれた「環境を整える時間」が決して飾りものではなく非常に重要なものだということは骨の髄まで理解させてもらいました。

両親が洗礼を受けたのは私が 5 歳の時でした。洗礼準備講座は講話と実習とがセットになっていて、女性はレジオ・マリエに入って老人ホームや障がい者施設でのお手伝い、男性はビンセンシ

オ・ア・パウロ会に入って廃品回収をすることになっていました。それまで、両親が二人で話しているのをあまり見たことがなかった私にとって、父と母が別々に帰って来て、それぞれが体験してきたことを報告しあう様子はとても新鮮でした。まさに、一人ひとりの判断基準が、福音の価値観と出会って、揺さぶられるような洗礼準備講座だったのだと思います。

私が司祭になって最初に赴任した小教区には中高生会がなく、しばらく堅信式も行われていないということでした。それで、信者さんたちにお願ひして、ご家庭の古新聞を毎日曜日、教会に持ってきていただくことにしました。ミサ後、堅信式を受ける予定の子どもたちと一緒に、古新聞の中に紛れ込んでいる折りこみチラシを抜き出す分別作業をし、それからほんの少し、堅信準備のお話をするという取り組みを始めたのです。一人の高校生が分別作業を手伝ってくれるようになったことをきっかけに人数が増え、高校生たちが、子どもたちを、公園や道端に落ちている空き缶拾いに連れて行くようになりました。実は、ある教会委員から「教会をゴミ置き場にするな」とお叱りを受けていたので、子どもたちが空き缶を拾ってきた時は、頭を抱えてしまいました。子どもたちに「拾ってきた空き缶を保管しておく場所がない」と伝えると、一人の中学生が「授産所に持って行ったらええやん」と教えてくれました。集めた空き缶を洗い、アルミ缶と鉄の缶とに分別して、授産所に運んだところ、授産所の方々にとても喜ばれました。プレス作業を障害者と一緒にするという体験は、教会から遠のいていた他の子どもたちを呼び戻す効果もありました。私は空き缶拾いや授産所でのプレス作業にはつき合わなかったのですが、彼らは日曜日の夕方、戻って来ると私に声をかけ、一緒に祈りをしようと招いてくれました。

あるお母さんから「息子は中3になるんやから、ミサが終わったらすぐに帰らせてください。受験に失敗しても、神父さんは責任とられへんやろ」と非常にきつく言われてしまいました。翌週のミサ

後、私がお母さんに「早よ家に帰りや」と言ったところ、本人は「自分で親を説得する」と言って、晩の祈りまで教会に居続けました。それから、針の筵に座られるような日曜日が続きました。一年後お母さんが、志望高校に息子さんが入ったことを報告に来てくれ、やっと胸をなでおろしました。「日曜日は朝から晩まで教会に入り浸ってたけど、平日は高3の娘よりも熱心に勉強してましたわ」とお母さんから聞いて、私は彼を心から尊敬しました。

私は今も、どのような取り組みをすれば、私たち自身の振る舞いが抜本的に改善されるようになるのかという回答をもっていません。今も模索中です。

派遣される小教区によって事情は大きく異なります。地域の慣習や決まりごと也不同じような取り組みは決してできません。ただ、派遣された小教区の様々な方々にいろいろと教えていただき、町内会の方々に導いていただくことで、その小教区での祈りや集いが、一人ひとりの生活習慣を振り返るきっかけとなり、社会の中で生かされていることを実感し、具体的な行動に結びつくにはどうしたらよいかという試行錯誤は続けさせていただいています。

### 3.まとめ

本書が発行されたおかげで、リーダーや小教区委員の方々と共に取り組む方向性が、これまで以上にはっきりさせられたと感じています。

本書112頁の72項に教皇フランシスコの使徒的勧告『ラウダーテ・デウム』61項が引用されています。

本物の信仰は、人間の心を強めるばかりでなく、生き方を変え、わたしたちの目標を変え、

他者へのかかわりや全被造界とのかかわりを照らし導いてくれる(略)

本書 118 頁からは「エコロジカルな教育」が紹介されています。その中で回勅『ラウダート・シ』  
213 項が引用されています。

(略)いのちに対する愛と敬意の示し方を学び、また、物を適切に利用すること、整頓するこ

とと清潔にすること、地域の生態系を尊重すること、すべての被造物を気遣うこと(略)

信仰教育、とりわけ初聖体から堅信の秘跡への準備の歩みが、「いのちに対する愛と敬意の示し方を学び、物を適切に利用すること、整頓すること、清潔にすること、地域の生態系を尊重すること、すべての被造物を気遣うこと」といった体験学習になれば、堅信式がまるで「教会学校の卒業式」のようになってしまうこともなくなるのではないのでしょうか。

本書 120 頁には次のように書かれています。

ともに暮らす家である地球を大切にする人を育てようとの『ラウダート・シ』の呼びかけに耳を傾けるなら、それぞれの教会共同体は、もう一つの家庭としての役割を果たしうるものとなるでしょう。

本書と出会う信者一人ひとりにとって、小教区生活そのものが、「振り返り、識別し、行動し、評価し、祝うものとなる」ことを心から願っています。

ご清聴、ありがとうございました。